The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Invisible Threat : Male-Male Conflicts, Blood Relations, and Family against Nation in Sam Shepard's Plays
Author(s)	森本, 道孝
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57879
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	森（もり）　本（もと）　道（みち）　孝（たか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３３１７　号
学位授与年月日	平成21年 9 月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	Invisible Threat : Male-Male Conflicts, Blood Relations, and Family against Nation in Sam Shepard's Plays （見えざる恐怖：サム・シェパード劇における男の闘い、血縁、家族から国家へ）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　森岡　裕一 （副査） 教　授　玉井　暲　　教　授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久 准教授　石割　隆喜

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、序論、七章からなる本論、および結論で構成された英文159頁、400字詰め原稿用紙換算で約450枚に相当する論文である。現代アメリカ演劇作家サム・シェパードの主要な関心は男性同士の関わり、特に、父親と息子や、男兄弟同士の血縁関係にある。この根源には、彼自身が血縁や祖先への強い興味を持っていたことがあり、同じ名前をつけられたことへの反発として、自身の名前のサミュエル(Samuel)をサム(Sam)に変更したことに顕著であるように、とくに父親との関係に強いこだわりを見せている。この関心は、自身のルーツへの関心と自然に結びついている。ゆえに、本論文では、シェパード劇にさまざまな形で登場する血の呪いを検証することを通じ、彼の作品世界の中心テーマの変奏と、それがいかにステージ上で表象されているかの検証を第一の目的としている。

第一章では、『ラ・トゥリスタ』(1967)と『見えざる手』(1969)に顕著に見られるように、過去の独特な扱いを分析した。とりわけ前者では、第一幕と第二幕が巧妙にずらされながら時系列の逆転した形で反復される。これにより、観客はまるでリプレイを見ているような状況に置かれ、自身のルーツを辿る登場人物たちが抱く見えざるものへの恐怖感に共感するよう仕組まれている点を指摘した。第二章では、『餓えた階級の呪い』(1976)、『埋められた子供』(1978)、『本物の西部』(1980)を対象に、父親と息子を中心とした男同士の関係の複雑さ、及びその派生形である男兄弟間の葛藤とその悲劇的な結末を分析した。第三章では、第二章で論じたテーマをさらに掘り下げ、『罪の歯』(1972)を中心に、闘う男たちのありようを描くことがシェパード劇の本質であることを例証した。第四章では、シェパード劇に登場するこういった男たちが一様に傷ついた存在として描かれ、その傷を隠そうと奮闘することに注目した。『埋められた子供』(1978)、『心の嘘』(1985)、『ショック状態』(1991)などの作品に顕著なように、戦争のトラウマを克服せんとする象徴的身振りを抽出し、なおかつ、それらの防御策は全て十分な機能を果たさず、かえって彼らの弱さを露呈する結果となっている点を指摘した。第五章では、マイナーな扱いと思われた女性登場人物が意外に重要な役割を果たしている点に注目した。『地獄の神』(2005)、『恋狂い』(1983)に顕著なように、彼女らは男性の語りを引き継ぎ、劇に幕を引く重要な存在である。第六章では、『コンスエラの眼』(1999)と『故ヘンリー・モス』(2002)を取り上げ、青い眼の白人男性が生命の危機に脅かされることに注目し、そこに示される危機感は、そのままシェパード自身の危機感と、アメリカにおける白人男性の危機感へと展開されており、このあたりの作品から、彼の視線はよりグローバルな方向へと進んでいる点を指摘した。第七章では、『地獄の神』を中心に、彼の政治的な視線への展開を探る。作中では、見えざるものの恐怖を端的に示すプルトニウムが扱われ、それが人々の知らぬ間に浸透していく恐怖を描いている。これは暗黙裡に戦争を正当化しているアメリカ国民の態度を批判的に見る彼の視線が反映されていると言える。

サム・シェパードの劇作品は、初期の個人的な関心に基づくものから、家族という単位へ、そしてアメリカ国家というより大きな単位へと展開している。だが、国家間の争いという大きなコンテキストを作品化する際も、彼の一貫した関心である男同士の闘いのモチーフが貫かれており、個人的視点と公的な問題意識を接合せんとするシェパードの苦闘の跡が辿られ、現代アメリカ演劇を代表する作家の本質が見出される。

論文審査の結果の要旨

現代アメリカ演劇界に占めるサム・シェパードの位置については疑問の余地がない。その主要な作品を網羅的、かつ詳細に分析した本論文の持つ意義は大きい。とくに、劇構造の細部にわたりモチーフ、シンボル、小道具の使われ方などきめ細かく実証する研究方法は堅実な成果を上げている。とりわけ、父子を中心とした家族間の愛憎の劇という主題に集中したアプローチは、従来の研究の延長上にあるとはいうものの、徹底した読みに基づいており、その緻密さは今後のシェパード研究に大いに貢献するものと思われる。また、登場人物がしばしば着脱する衣服のもつ意味や身体的ハンディキャップ、言語障害を持つ人物が頻出する意義を分析したくだりなど、従来の研究に見られない斬新な着眼点が光っている。同じことは、男性登場人物の陰で忘却されがちな女性登場人物に目を向けた点についても言え、彼女たちが劇中で果たす役割の分析にはオリジナルな発見が見受けられる。とりわけ、シェパード劇において、ドラマの幕引きを司るのは女性登場人物であるとの視点は示唆に富み、シェパード劇のみならず、アメリカ演劇全般の理解に貢献するように思われる。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。劇をパフォーマンスという観点で分析する立場と文学テクストとして読む立場がときに混在したり、シェパード演劇の総体を扱おうとするあまり、後半では、焦点が家族劇から個人と国家の葛藤という大きな問題に拡散しており、前半部での議論が後半で打ち消される印象すら抱かせる。同一主題を論じるのに、さまざまな作品への言及があり、それは、議論を立体化するのに貢献する半面、叙述に繰り返しが多い点も反省の余地はあろう。シェパードの作品世界に深く肉薄するアプローチは逆に大きなコンテキストに作品を関連付けて論じる姿勢の希薄さと裏腹であり、今後の研究の課題である。しかし、それらの点は本論文の価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。